

第43回城戸賞応募作

「モザイク」

【あらすじ】

3歳の時の事故で両目の視力を失った結(33)は、全盲というハンデを地道な努力と勝ち気な性格で乗り越えてきた。ひよんなことで知り合った一弥とできちゃった婚で息子の陸をもうける。陸は引つ込み思案で内弁慶の4歳。継母の良美の協力もあり育児と仕事、家事に追われながらも充実した日々を過ごしていた。

ある日、たまたま受けた眼科検診で回復は不可能と思われていた視力を取り戻せるかもしれないと眼科医に告げられる。悩んだ末、愛する家族と同じ景色を見たいと手術を決意する。数カ月後、手術は無事に成功。包帯が外され、28年ぶりに色や動きのある世界を取り戻す。

目で見る世界は結にとってすべてが新鮮で驚きと感動の連続だった。しかし、そんな喜びも束の間、「見る」という新しい感覚に適応する困難さに次第にうちのめされていく。色や動きは見えても物との距離や空間認識ができず、止まっている車が突進してきて見えたり、人の顔も認識できない。不安に苛まれた結は、陸や良美に辛くあたり、ありもしない一弥の浮気を責めるなど、目に映るものすべてに疑心暗鬼になっていく。そんな結を一弥は知人の脳神経科医のもとへ連れていく。視力は回復しているのに正常に見えないのは脳に原因があるとわかったからだ。

検査の結果、結の脳の視覚野は、聴覚や触覚など別の神経に拡大され、視覚に対応する神経回路はすでに活動を止めていることがわかる。それは一生、普通の人と同じようにモノを見ることができないという辛い宣告であった。その夜、結は酒を大量に飲み、陸が見ている前でベランダから身を投げた。

幸い軽傷ですんだ結だったが、心の治療のために入院することになる。一方、陸も母親の悲しい瞬間を目撃したショックで家に帰ることができなくなり、祖父母宅で暮らすことになった。

1ヶ月後、保育園の生活発表会で「星の王子さま」の劇に出ていた陸は、客席に結の姿を見つめる。退院した結は再び家族3人で暮らすために陸にある提案をする……

【登場人物表】

一木結（3・5・10・23・28・33）全盲の視覚障害者。

商社勤務

一木陸（4）結の一人息子

一木一弥（24・29・34）結の夫。商社勤務

笹川良美（37・55・60）結の継母

笹川敬二（62・67）結の父

小山内毅（52）眼科医

川上美奈代（34）陸の保育園の保育士

堀江宗一（64）脳科学総合研究センターのセンター長

三浦麻美（36）ママ友

一木隆明（65）一弥の父

一木曜子（62）一弥の母

一木孝博（40）一弥の兄

一木早苗（38）孝博の妻

一木沙耶（8）孝博の娘

一木優斗（5）孝博の息子

本間（52）一弥の上司

ユウキ（4）陸の保育園の友達

遠藤理恵（声だけ）

受付嬢

医師A・B

看護師A・B・C・D

【参考・引用資料】

『火星の人類学者』オリヴァー・サックス（早川書房）

『46年目の光』ロバート・カーソン（エヌティティ出版）

『新訳 星の王子さま』サンIIテグジュペリ（宝島社）

『人間の土地』サンIIテグジュペリ（新潮社）

○一木家マンション・寝室（現在・朝）

部屋中に虹色の光が舞う。

窓辺に吊るされたアクリルビーズのモ  
ービルが朝の光を受けてカラフルな光  
を乱舞させている。

その光を掴もうと伸びる小さな手。

ダブルベッドで寝ている一木陸（4）。

陸のM「むかーし、昔……って言ってもそん  
なに昔じゃない……」

○走行する電車・内（10年前）

適度に混んでいる車内。

優先座席で口を開け、だらしなく寝て  
いる一木一弥（24）。

陸のM「……ボクがまだパパの細胞の中でグ  
ーグー眠って、ママを待ってたときの昔」

ドア脇に白杖を持った女性。この時点  
で顔は見えないが笹川結（23）。

電車が水道橋駅に到着し、ドアが開く。  
結、白杖で地面を探りながらホームに  
降り立ち、点字ブロックに沿って歩き  
出す。

ドアが閉まる警報音で目を覚ました一  
弥、閉まりかけのドアから飛び出る。

一弥「セーフ」

一弥、スマホを取り出し、歩きながら  
電話をかける。

前方に白杖をスライドさせて歩く結。

一弥「あ、一木です。お疲れさまです。今、  
打合せ終わりました、はい。えっと（駅名  
板の『水道橋駅』の文字をチラ見して）こ  
こから水道橋まで1時間かかるんで、社の  
戻りは3時過ぎになります。はい、はい、  
お疲れさまです！」

一弥（電話を切り）やーり、どっかでお茶  
しよお」

嬉々と歩き出す一弥。

○同・改札

改札から出てくる一弥、ふと一隅に目

が止まる。

結が点字ブロックの道を改札の方へ引き返してくるのが見える。

結の正面、スマホを操作しながら歩いてくる男がいる。

陸のM「パパの心臓がドクンドクンってなつて、うるさくて起きたらママがいた」

結の超音波歩行補助具が前方の障害物を探知して振動する。

一弥「危っ……」

一弥が叫びかけた時、結が足を止めて声をあげる。

結「どこ見て歩いてんだよ！」

前方の男、驚いてさっと横に逸れる。

一弥「……」

結「ぶっ殺すぞ」

捨て台詞を吐き、再び歩き出す結。

陸のM「ママには3本の足があつて、前の方の足がどんな道でも歩けるようにして、手から出るビームがどんな壁でも歩けるようにしてた。口から百万度の火を吹いて悪い奴だつてやつつけた。ママはものすごく強かったから。ママがいるなら大丈夫、ボクはここに生まれてもいいよつて、ボクがパパに教えたの。この人だよ、この人がボクのママだよつて」

結、方向を見失い白線ブロックの上で立ち往生している。

意を決し結に声をかける一弥。

一弥「あの、何かお困りですか？」

○タイトル『モザイク』

○オフィス街の道

結、左手で一弥の肘を持ち、右手で白杖をスライドさせながら歩く。

一弥、緊張して歩き方が不自然。

○三葉商事本社ビル・ロビー

受付カウンターの背面に「三葉商事グ

ループ本社」の文字とロゴ。

一弥の手引きで受付嬢のいるカウンターの前に立つ結。

受付嬢、いぶかしげに一弥を見る。

受付嬢「(一弥に)お疲れさまです」

一弥「(受付嬢と顔見知り)お疲れさまです。

あの、この方、本間部長とお約束されている  
そうで、来客用のカードお願いします」

受付嬢、来客用の入館証を差し出す。

○同・オフィス

一弥の手引きで入ってくる結。

なにごとか二人に目を向ける社員。

課長が通りかかり、

課長「あれ、一木、お前、戻り3時じゃ」

一弥「あ、いや、あの、えっと……」

奥の入口から本間(52)が社員と話し  
しながら入ってくる。

本間「高騰して3倍近い金額になってんだよ、  
供給自体も不安定だからさ……」

本間の声だとわかり、結、一弥の腕を  
引き寄せ、本間の方へ歩き出す。

一弥「(本間の近くまで来て)あの、本間部  
長！」

本間「？」

本間「(結を見て)あれ、君は確か……」

結「はい、先日、本間部長に面接していただ  
いた笹川結です」

本間「ああ……はい、弊社の障害者雇用枠で  
応募された。で、えっと、今日はどういっ  
た？」

結、バッグから三つ折りの紙を取り出  
し、広げて本間に見せる。

結「これは、どういうことでしょうか」

不採用通知。

結「本間部長、仰ってくださいましたよね……  
……」

○(結の回想) 面接会場

結を面接する3人の面接官の中央に本

間がある。

本間「応募書類を拝見しましたが、フランス語を専攻し、星の王子さまのサンテグジュペリの著書の多くを原書で読破、アルバイトの経験も豊富で、中学の時に出場したトライアスロンではトップ10入りを果たす……一木さん、恐るべき人材だ。正直、一般雇用枠で採用したいくらいですよ」

○元の三葉商事のオフィス

結、一弥、本間。

本間「……誤解してもらっちゃ困る。私はあなたを強く推したんですよ、しかし、今回は予想を上回る応募が……」

結「（遮って文面を諳んじる）今回は予想を上回る多数のご応募をいただき、弊社といたしましても大変苦慮した上での決定でございますが、ご期待に添えかねる結果となりました？ 人が目が見えないと思って、こんな回りくどい文面を文書で送りつけてたつた一言『不採用』って点字があればわかります。じゃなきやメールで通知してくればいいんです」

本間「なるほど、貴重なご意見として人事に共有させましょう」

結「私那不採用になったのは、目が全く見えない全盲だからなんですよね？」

○（結の回想）同・ビル前の道

花壇の縁に腰掛け電話で話す結。

結「調子がいい面接官だったけどさ、たぶん、今度こそいけると思う……うん」

ビルから本間が他の面接官らと話しながら出てくる。

本間「最後の子ね、スキル高過ぎだよ、せめて弱視とか少しでも見えてたらね……全く見えないとなるといろいろ面倒だし、万が一の事故があっても責任取れないしさ」

物陰でその話声を聞いている結。

○元の三葉商事のオフィス

本間「(弁解の言葉も見つからない)……」

結「万が一の事故って何ですか？ 私を雇うとそんなに面倒なことが起きますか？ 別に特別扱いなんか望んでません。たった3文字の『不採用』を告げるために、無駄な前置きに紙面を割いて、封書でご丁寧に発送するようなことはできても、目の見えないう人間にわかるように用件を伝えたり、ぶつからないように気をつけたりすることは面倒でできないって言うんですか？」

たじろいぐ本間。

○笹川家・居間(その5年後)

一弥(29)が独白調で話している。

一弥「結局、結さんは本間部長の紹介でグループ会社に入社しまして、フロアは違いますが、同じビルで仕事の内容も関係してたこともあって、親交を深めていったというわけです。自分は大学も推薦で会社も親のコネで入りましたし、大した挫折もなく生きてきて、彼女といると毎日が驚きの連続で、予想外のこと次々に起こって。生きるってこんなにワクワクするんだって。新しい命の誕生ってすごい驚きじゃないですか……」

一弥の隣にお腹の大きな結(28)。

向いに笹川良美(55)、笹川敬二

(62)が鎮座している。

一弥「結さんと結婚させてください！」

頭を下げる一弥。

良美・笹川「！」

結「よく言った」

結、一弥の頭をぼんぼんと叩く。

○一木家マンション・リビング(現在・朝)

すっきりと整頓された美しい室内。

リビングボードに飾られた写真。一弥

と妊婦の結の結婚式、赤ちゃんを抱いた結など。



キッチンで朝食と弁当の準備に追われる結(33)。目が見えないとは思えない手際の良さ。

○同・洗面所(朝)

寝ぼけ眼で歯磨きしている一弥(34)。

○同・寝室(朝)

ダブルベッドでゴロゴロ寝返りを打って遊んでいる陸。

遠くから結の声が聞こえる。

結の声「りくう？ ねえ、陸、起きてる？

ちよっとパパ、陸、起こってきて」

その声に反応してムクツと起きる陸。

しばらくしてドアが開き、一弥が顔を出す。

一弥「陸、ママが起きろって」

部屋には誰もいない。

○同・リビング(朝)

一弥が一人で入ってくる。

背後から忍び足でついてくる陸。

食卓に朝食を並べている結。

一弥「陸、部屋にいないんだけど」

結「あ、そ、どこ行ったんだろ……」

陸「(笑いを堪え)……」

結「こらあ」

がばっと陸に抱きつく結。

結「ママを騙そうなんて百年早いんじゃない」

じゃれ合う結と陸。

結「ほら、顔洗ってきて」

ぼんと陸のお尻を叩く結。

○道(朝)

結、右手で白杖をスライドさせ、左手で陸と手をつなぎ歩いている。

横断歩道にさしかかる二人。

信号が点滅し、陸が結の手をクイッと小さく押し上げる。

赤信号で立ち止まる結と陸。

○保育園・内（朝）

結と陸を出迎える保育士の川上美奈代（34）。

結「おはようございます！」

美奈代「おはようございます。おはよ、りっくん」

結の後ろに隠れてもじもじする陸。

結「ほら、陸、ご挨拶は？」

陸「（小声で）おはようございます」

結「すみません、なかなか内弁慶がなおらかなくて」

美奈代「恥ずかしんだもんね」

陸の顔を覗き込んで「？」となる美奈代。

美奈代「りっくん、なんかお目々赤くない？」

結「え、そうなんですか？ 陸（陸に）お

目々、大丈夫？ 痛い？ かゆい？」

陸「（小首をかしげ）……わかんない」

結「わかんないって……」

美奈代「そんなひどい充血でもないんで、園で少し様子を見えます。お母さん、心配なさらないで、お仕事行ってください」

結「（心配）……」

○眼科医院・診察室（朝）

医療機器の灯だけの暗室。

陸が良美（60）の膝の上にちよこんと座り、看護師Aに細隙灯の顎あてに頭を押さえられ、小山内毅（52）の検査を受けている。

○同・待合室（朝）

ベンチで落ち着きなく座る結。

良美の声「ありがとうございます」

「お大事に」と看護師Aに見送られ、診察室から出て来る良美と陸。

結「（声の方に歩み寄り）どうだった？」

良美「軽い結膜炎だって、清潔にすれば治

るけど、どうせ、あんたが納得しないと思  
ったから、目薬出してもらうことにした」

結「そりゃそうでしょ」

良美「それより結、あんた、仕事は？」

結「午後からの出社にしてもらったけど」

良美「じゃあさ、良い機会だから、あなたも  
見てもらいなさいよ、目」

結「え？」

良美「結の話したらね、先生も見てみたいっ  
て仰って。もう随分、検査なんてしてない  
じゃない、ね？」

#### ○同・検査室

検査機器に顎を乗せ検査を受ける結。

× × ×

ベッドに横たわる結。

小山内が結の瞼の上から検査器具をあ  
てている。モニターに超音波の白黒の  
画像が映る。

#### ○同・診察室

小山内、パソコンの電子カルテにペン  
タブレットで所見を書き終え、結の方  
に向き直す。

小山内「お母さまから少しお聞きしましたが、  
失明の原因は3歳時の消石灰の飛散による  
事故ということですね」

結「はい……私はほとんど覚えていないんで  
すが、父から聞いた話では、母が目を離し  
たすきに、肥料の袋で遊んでいて、中に残  
っていた消石灰を頭から浴びたそうです。  
母が気がついて病院に連れて行った時には  
もう手遅れだったみたいで……さっきの母  
ではなくて、私を生んだ母親の方です。事  
故のあと両親は離婚したので」

小山内「そうですか……角膜移植の手術は一  
度受けられたようですね」

結「はい、5歳の時に。でも、拒絶反応が出  
たり合併症を起こしたりして。その時の先  
生はもう完全に治すのは無理だろうって」

小山内「あなたの角膜はひどく損傷を受けてはいますが、超音波で目の奥の状態を調べてみたところ、網膜の視神経は正常です。あなたが移植手術を受けてから25年、医療技術は飛躍的に進歩してましてね。今の技術でなら視力を取り戻せる可能性は十分にあります」

結「え？ それって、どういうことですか？」

小山内「手術をして成功すれば、視力を取り戻せる可能性があるということです」

結「……もしかして、目が見えるようになるってことですか？」

小山内「そうです」

結「……」

○同・待合室

ベンチで陸に絵本を読んでいる良美。

看護師Aの手引きで診察室から出てくる結。

結、そのまま呆然と立ち尽くす。

良美「(見て)？」

○走行する良美の車・内

良美、結、陸。無言。

結「……」

良美「……」

結「ねえ、ちょっと何か言ったら」

良美「ごめん、ちょっと信じられなくて……」

結「だね……」

○(結の回想)道(23年前・早朝)

車のない車道で自転車の練習をしている結(10)と、それを自転車で先導する良美(37)。

結「お母さん、怖いよお」

今にも歩道の縁石に乗り上げそうな結の自転車。

良美「結、ちゃんとお母さんの声聞いて、結、ここだよ、お母さんはここ、真っすぐ、も

う少しハンドルを右に切って」

その声を頼りに必死に自転車を漕ぐ結。

○（結の回想）トライアスロンの競技会場

泣いている結。側に良美。

結「あんなに練習したのに……」

良美「もう泣かないの。また来年頑張ればい  
いんだから」

結「去年もそう言っ、やっぱビリだったじ  
ゃん」

良美「仕方ないじゃない、あんたが一番年下  
なんだから」

結「違う」

良美「何が違うの？」

結「……」

良美「何？ ちゃんと言いたいことがあつた  
ら言葉にしなさい。口があるでしょ」

結「目のせいだもん……」

良美「……」

結「目が見えてたら、絶対にビリじゃなかつ  
た……」

良美「結の目が見えてたらビリじゃなかつた  
かもしれないし、そうじゃなかったかもし  
れない。そもそもトライアスロンなんてチ  
ヤレンジしてなかったかもしれない。結、  
『かもしれない』って言葉は人を小さな殻  
に閉じ込めてしまう呪いの言葉なの」

結「だって、仕方ないじゃん本当にそう思っ  
てんだもん。目が見えないからだもん。言  
葉にしろって言ったのお母さんだからね」

良美「それは結の考え方が間違ってる。正し  
い言葉が出るように考え方を改めなさい。  
あんたは逃げてるだけ、悔しいって気持ち  
に押しつぶされるのが嫌で、目が見えない  
せいにしてるだけ」

○同・寝室（夜）

パジャマの陸がベッドに入る。

結が陸の目に目薬を差す。的が外れて  
陸の口に入る。

陸「にがーい」

結「ああ、もう、どこだお目々は」

結、陸の脛を指で開き、なんとか両目にさす。

陸「命中！」

結「ああ、良かった」

陸「ママ、絵本、読んで」

結「何がいい？」

陸「恐竜の絵が飛び出るやつ」

結「お目々ぱっちりしちやうからだめ、星の王子さまにしようか？」

陸「じゃあ、面白くしてえ」

結「よし、わかった」

「んん」と軽く咳払いをし、

結「ぼくが六つのとき、ジャングルのことを書いた本の中ですごい絵を見たことがある。それは……」

ミュージカル調で「星の王子さま」を

諷んじる結。くっくと笑う陸。

一弥の声「えええ！ マジい！」

○一木家・リビング（夜）

結、料理の皿を持って一弥の前に置く。

結「ちよつと声がでかい！ 陸、起きんじやん」

一弥「逆に起こしたいくらいなんだけど、家族の重大発表、聞かせてやらないと（と立ち上がるうとして）」

結「（きつと睨んで）やめてよね」

一弥「（素直に座る）はい」

結「あんた、酒、飲んだ？」  
一弥「（少し動揺）いいえ、月水金は酒飲むなってあなたに言われてますので飲んでませんよ」

結「なら、良いけど。代わりにおやつばっか食べてんじやない？ お昼は何食べたの」

一弥「なんで」

結「最近、太ってない？（一弥の横っ腹をつまみ）太りそうなもの食べさせてないけどなあ。お昼、お弁当にする？」

一弥「あなたね、これ以上、自分の仕事増やしてどうするのって、俺の肉よりあなたの目でしょ。で、いつ、手術」

結「いつって、まだ手術するかもわかんないよ」

一弥「なんで？ 目が見えるようになりたくないわけ？」

結「私に目が見えるようになってもらいたいわけ？」

一弥「質問に質問で返すなよ」

結「だってわかんないだもん。そりゃあ、昔は目が見えなくて悔しい思いしたけど、今は別にこの生活に不満なんてないし。でも、一弥が私が見えた方が良いつて言うんなら、手術してもいいけど」

一弥「お前、それずるいでしょ。俺だって別に結が見えようが見えまいが関係ないし、自分で決めるよ、そんなこと」

結「うん……」

一弥「でも、まあ、そんな焦って決めることないんじゃない。ゆっくり考えればいいよ、ゆっくり」

結「うん……」

○保育園・グラウンド（日替わり）

万国旗がはためく青空のもとで運動会が執り行われている。

美奈代の誘導で壇上に上がりマイクに向かって話す結。

結「おはようございます！」

園児や保護者「おはようございます」

結「元気がないぞお、もう一回！ おはようございまあーす」

園児や保護者「おはようございまあす！」

結「うわ、元気な声。ありがとうございますます！ ええ、今回、運動会役員を務めさせていただきました一木です。御来賓の皆様、保護者の皆様、本日はお忙しい中、お越し頂きありがとうございます……」

保護者席に一弥、良美、笹川がいる。

結「今日は待ちに待った運動会です。みんなの晴れてほしいって気持ちがお空に届いたのかな、雲ひとつない青空になりました……」

グラウンドから結を見ている陸。

陸にすり寄るユウキ。

ユウキ「りっくんのママ、目が見えないのになんでお空の色がわかるの？」

陸「ママは見えてるよ」

ユウキ「じゃあ、手、振ってみ」

陸「やだ」

ユウキ、陸の腕を掴み、結に向かって

無理やりその手を振らせる。

結はもちろん気づかない。

陸「やめろ」

その手を振り払う陸。

ユウキ「ほおら見えてないもん」

陸、困ったような悔しいような表情で

結を見る。

結「……今日は、ビデオ撮影、写真撮影はほどほどに、みなさんは目が見えるんですから、その目でしっかりと子ども達を見て、拍手と声援を贈ってあげてください。それではみなさん、くれぐれもけがのないよう注意して、運動会、盛り上がって行きましょう！」

会場から拍手があがる。

× × ×

かけっこ。

横一列に並ぶ園児たち。その中に陸と

ユウキがいる。

保育士の「よーいどん！」の合図で一

斉に園児たちが走りだす。

保護者席で声援を贈る結、一弥、良美、

笹川。

結「陸、頑張れ！ 行けえ！」

走る園児たち。

ユウキが1位で、他の園児が次々とゴールし、陸はビリで到着。

結「（一弥に）ねえ、どうだった、陸は？」



一弥「すごい！ 陸、頑張ったすごい、一番だ、ねえ、お父さん」

笹川「うん、一番……すごかった」

× × ×

陸、とぼとぼと結たちの方へ戻って来る。

一弥「あ、陸、帰ってきた」

ユウキが小走りで陸を追い越し、結たちのいる席に近づく。「一等賞すごいねえ」などと保護者らがユウキに称賛の声をかける。

陸だと勘違いして、ユウキを抱き上げる結。

結「よくやったあ、陸、さすが私の息子！」

一弥・良美・笹川「！」

側にいた三浦麻美（36）がツツコむ。

麻美「やだあ、りっくんママ、子ども間違えてる。オタクの子はこっち」

結の手を掴んで、近くにいる陸の頭を持っていく。

結「え？」

抱き上げたユウキをおろす結。

結「ごめーん、おばちゃん、間違えちゃったよお」

どつとその場に笑いが起こる。

陸だけがムスツと仏頂面になる。

陸の声「ママのブス！」

○一木家・居間

結「今なんだったあ！」

一弥を真ん中にして、その回りを鬼の形相で陸を追いかける結。

一弥「陸、今のはまずいよ。ママはブスじゃないんだから」

陸「ママのブスブス、デブデブ、はげちゃびん、べえーだ」

結「陸う……自分が悪いくせに、謝りもしないってもお」

陸「ママが悪いもん」

結「なんでママが悪いのよ」

陸「ママはおこりんぼうだから悪い」

結「あんたが、パパが一番だって嘘つくように頼んだんでしょ。嘘つく陸が悪い、パパも悪いけど」

陸「だって、ビリだったら怒るくせに」

結「だって、陸はママの子だもん、頑張れば一番になるのに、本気で走らないから悪いんでしょ」

陸「どうせ見えないくせに！」

結「(ショック)……」

結、ぱたりと動きを止める。

一弥「陸、今のはだめだと思っよう」

陸、急に顔を歪ませ、一弥の胸に顔をうずめて泣き出す。

一弥、陸を抱き上げて、

一弥「はい、もうケンカはおしまい。ねえ、

陸、パパと一緒に謝る。せーの、ママ、嘘ついてごめんなさい」

一弥、陸を抱いたまま結に頭を下げる。

一弥「陸？」

陸、一弥の耳元に何やら囁く。

陸「(ヒソヒソ)……」

結「なんて？」

一弥「ママも謝れって」

結「なんで、私が？」

一弥「ユウキを陸と間違えて抱っこしたからだって」

結「……ああ」

陸「(一弥の首にしがみついて顔を上げな

い)……」

結「そっか……そうだね、ママも悪いね、ごめん」

陸、無視。

結「ねえ、ごめんって謝ってんじゃない。ねえ、

陸、陸ってばあ」

陸「(無視)……」

一弥「陸？」

結「はい、わかりました。何がいい？ ママ、なんでも言うこと聞くよ。なんでも言っつて。陸の命令になんでも従うから、ねえ、ねえ

つてばあ」

陸「じゃあね……」

陸、満面の笑顔で顔を上げる。

結「何？」

陸「お布団になれ」

結「(怪訝) お布団？」

× × ×

仰向けで寝る結の体の上で寝る陸。

結「(ちよっと苦しい) どうですか、ママの

お布団の寝心地は」

陸、こそばゆいように笑う。

一弥「いいなあ、いいなあ、パパもママの布団に寝たいよお」

結「(一弥に) うるさい、あんたも布団」

一弥「じゃあ、パパも布団になる！」

結の隣りに寝転がる一弥。

結「うわ、おっきいお布団になったぞ」

陸、きやきやと笑いながら二人の体の上を転がって喜ぶ。

### ○同・ベランダ(夜)

高台に建つマンションの3階。

眼下は低層住宅が広がり空が広い。

結と一弥、酒を飲んでいる。

結「(大きく息を吸い) 今日は空気が澄んでて気持ちいい」

一弥「うん」

結「星がきれいに見えるんだらうね」

一弥「(見上げ) あ、ほんとだ、きれい」

結「(フランス語で) 愛するということは、おたがいに顔を見あうことではなくて、いっしょに同じ方向を見ること」

一弥「何? いきなり」

結「サンテグジュペリの『人間の土地』って本の中の言葉」

一弥「どういう意味？」

結「教えない」

一弥「なんだよそれ？」

結「陸や一弥が見てる景色を一緒に見るって、どんな感じなんだらう」

一弥「……」  
結「……」

○同・リビング（8ヶ月後・朝）

散らかった室内。

壁に6月のカレンダー。29日の枠に陸が描いた「目の絵」と「うまれる」の文字。

パンツ一丁の陸、玩具で遊んでいる。

トイレの洗浄音がしたかと思うと、一弥が入ってくる。

一弥「ちよっとお、まだ着替えてないのお」

陸「ねえ、パパあ、朝ごはんは？」

一弥「バナナなかった？」

陸「昨日、全部食べた」

一弥「じゃあもう時間ないしお昼にまとめて食おう」

陸「ママが朝ごはんちゃんと食べないとバカになるって」

一弥「パパも陸も優秀だから少しバカになった方がいいの。とにかく早く服着て、お昼過ぎには病院に着いてないといけないんだからさ。あ、ママには朝ごはん抜いたことは内緒ね」

陸「はい」

○大学病院・病室

看護師Bの介助でベッドから起き上がる結。目を覆う包帯が痛々しい。

小気味よい足音と共に一弥の声が聞こえる。

一弥の声「陸、病院は走るなって」

勢いよく駆け込んできた陸、看護師Bがいるのがわかると突然しおらしくなる。

結「誰だ、そこでモジモジしてるのは？ おこい」

結が両手を広げると、陸、その胸に飛び込む。

結「（陸の頭や顔をぐちゃぐちゃにしなが

ら)りくう)、会いたかったよお」  
一弥が入ってきて看護師Bに一礼する。

#### ○同・診察室

陸と一弥が見守る中、結の目を覆う包帯が、医師Aの手で外され、まぶたを覆うガーゼが取り除かれる。

恐る恐る目を開く結。

結の目にどつと光の波が押し寄せる。

強烈な明るさに思わず両手で目を塞ぐ。

陸「ママ？」

その声でゆっくりと目を開く結。

真っ白だった視界に今度は色という色がどつと押し寄せてくる。青色(陸のシャツの色)の何かが動いたかと思うと、その青が結の体にくつつく。

結の顔を覗き込む陸。

陸「ママのお目々さん、初めまして。ボクが陸ですよ」

青色の上に肌色、その一部、うすいピンの何かがその声と共に動く。

結、指でその動くものに触れるとそれは陸の小さな唇。

結の表情が笑みに変わり、

結「うそみたい……」

結、陸の目や鼻など一つ一つを確認するように視線を動かしながら手で触れる。

結「これが陸の目、鼻、口、肩、あ、こんな可愛い手……イチ、ニ、サン、シ……ちやんと5本の指まである……」

一弥、結の前に跪く。

一弥「結……」

結の視点が一弥の顔全体に這う。

結、一弥の首に手を伸ばし、引き寄せて嗚咽する。

結に手を伸ばして抱きつく陸。

陸のM「最初の世界は初めましてがいっぱい。はだかんぼだから寒いし、全部が真っ白でこわくてボクもいっぱい泣いた」

○結が陸を出産した時の映像

赤ん坊の陸が激しく泣いている。

看護師Cが陸を分娩台の結の腕に抱かせる。

結の腕の中で泣いている陸。

結「初めまして、私がママですよ」

陸のM「でも、ママがいた……」

○もとの大学病院・ロビー

陸と手を繋いでやってくる結。

高い天井とガラス張りの開放的な空間。

窓から燦々と降り注ぐ日光。

キラキラと輝く世界を見上げ呆然となる結。

次の瞬間、モザイクの断片が動くように色や様々な形が目の前に迫ってくる。

陸のM「ママがたくさん抱っこしたら、寒くなくなつて、真っ白いのが赤とか黄色とか青とかいろんな色になつて、いろんな形がたくさんあるつてわかったら、結構面白いって思った」

結、黒い障害物の前で立ち止まる。

結「なにこれ」

結、足の先でその黒いものに触れようとして、ズボツと突き刺さる、かと思う

とそれはただの床に落ちた植栽の影。

結、床に膝をつきペタペタとその影と光の境界線を手で触れて確かめる。

結「ああ、影だ、ねえ、陸、これ影だよ」

陸「そうだよ」

陸、光の前に立ち、手を振ったり、ジャンプする。

陸「ママ、ボクの影、わかる？」

陸の元気な影。

結「陸の影……陸が飛び跳ねてる……」

× × ×

結と陸、壁に掛けられた抽象画を見ている。

結「これが絵？」

陸「ピカソの絵」

結「ウン」

結、手探りで、絵画の脇のプレートを見つめ、題名と作者を見定めようと顔を近づける。

書かれてある文字が読めない。

結「なんて書いてあるの？」

陸「わかんない」

結、絵に鼻がつくほど近寄って見る。

様々な色が共鳴しモザイクのように見える。

医師Aの声「……現時点での視力は0・2程度です」

#### ○同・診察室

医師Aと話す結。

医師A「しばらくは週に一度、小山内先生の病院に通院していただいて、目のケアとトレーニングを続けてください。順調にければ0・7くらいまで視力は回復すると思います」

結「0・7？」

医師A「眼鏡なしで車が運転できる視力です」

#### ○一弥が運転する車・内（夕）

窓外を見ている結。

木々の切れ間に見え隠れする光。西日に照らされ優しく光る川面。その上をゆくカモの親子。

陸はチャイルドシートで寝ている。

陸の手から玩具が落ちる。

助手席の結、振りかえり、シートの下に落ちていた玩具を拾い上げる。

視覚だけを頼りに物を拾う、結にとって初めての経験。

#### ○笹川家・表（夕）

畑が点在する郊外住宅地の広い敷地に建つ家。

砂利敷きの庭に一弥の車が進入して停まる。

玄関のドアが開き、良美と笹川が出てくる。

助手席の結が降車し、白杖なしで良美の方へ歩いていく。

結「(指で差し)お母さん、お父さん」

うわっと泣いて結に抱きつく良美。

笹川、膝からくずれ、踞ったまま泣く。

その様子を見守る一弥。

一弥の腕で眠る陸。

○一木家マンション・脱衣所(数日後・夜)

風呂場から聞こえてくる陸と結の声。

陸の声「ママ、早く、早く、始まつちゃう」

結の声「録画してるから大丈夫」

すごい勢いで風呂場から出てくる陸。

ぞんざいに体を拭き、パジャマを掴んで裸のまま脱衣所を出る。

結「(風呂場から)こら、ちゃんと服着なさい!」

風呂場から出てくる結、バスタオルで体を拭きながら、ふと鏡に映った自分の体に目をやる。

バスタオルを取り、全裸の自分を鏡に映して見る。

結「……」

結、くるりと向きを変え、背中を見る。

腰骨のあたりに複数の黒い影。

指で触れてみる結。

○同・リビング(夜)

テレビでアニメが流れている。

パンツ一丁でテレビに見入る陸。

結、入ってきて呆然とする。

部屋はテレビらしき色の集合体がチカチカしている以外、全体がモヤっとして、所々に物体の輪郭らしき形が見えるだけで、どこに陸がいるのかわからない



結「陸？」

陸「(テレビに夢中)……」

結「(大声で)陸！」

陸「もお、うるさいママ！」

結「いるなら返事してよ」

声の方へ歩み寄り、陸に触れると途端に陸が見える。

結「こら風邪ひくよ、パジャマは？」

陸、テレビに視線を向けたまま、パジャマを結に渡す。

陸にパジャマを着せながら、

結「ねえ、陸、ちよつと見て」

陸「？」

結「ママの背中のこと何？」

上着をめくり背中の傷痕を陸に見せる結。

結「これ」

陸「しっぽのあと」

結「しっぽ？」

陸「ママのお尻にしっぽがあつて、手術で取つたつて、ばあばが言つてた」

結「またそんな適当なこと……」

○同・リビングの和室(夜)

一弥が居心地悪そうに全裸で布団に寝ている。

結が一弥の恥部を観察しているのだ。

結「はい、次、うつぶせ」

一弥、言われるままうつぶせになる。

一弥のお尻などを見る結。

一弥「ねえ、ちよつとそんな顔近づけて見ないでよ……ちよ、ちよつと恥ずかしいんだけど」

結「うるさい、そつちは今まで散々私の見てきたんだから、いいじゃない」

一弥「そんな……」

結「あ、そうだ。ねえ、私の背中のこと(指で示す)何？」

一弥「？」

結「今まで気づかなかつたんだけどこの辺、

皮膚が少し盛り上がってるでしょ」

一弥「なんか転んでできた痕なんじゃない。

お母さんに聞いてみれば」

結「うん……」

○結の夢

ぼんやりとした映像。

悲鳴のような激しい子ども泣き声。

ガタンと何かが倒れる大きな音がして、

咳き込みながらさらにその泣き声が激

しくなる。

子どもの声「……ママあ！」

○同・寝室（深夜）

ベッドで目を覚ます結。

隣で寝息を立てている陸。

○同・玄関（朝）

朝の身支度を整えた結と陸が来る。昼

寝用布団のシートなどがあるので荷物

が多い。

結が出した靴に足を入れる陸。

陸「なんか、きつーい」

結「うそ、もう履けなくなっちゃった？ ま

だそんなに履いてないのに」

陸「恐竜のシューズにする」

結「キャラクターのシューズはだめ」

陸「恐竜はキャラクターじゃないよ」

結「とにかく絵がついてるのはだめなの」

一弥が来る。

一弥「どうしたの？」

結「靴が小さくなっちゃって、もういつこの

は泥だらけで、洗ってないし」

一弥「どうせまた汚れんだからいいじゃん。

それより早く、俺、遅刻する」

結「いいよ。私、一人で保育園連れて行くか

ら」

一弥「今日は荷物も多いしき、まだ目、慣れ  
てないんでしょ、一緒に行くよ」

○同・エントランス（朝）

マンションのエントランスから出てくる結、陸、一弥。

陸「ママ、足！ 忘れてる！」

結「ああ、白杖ね、もう必要ないの。ママ、目が見えるようになったから」

陸「もう3本足じゃないのお」

結「そうこれからは普通の人みたいに2本足で歩くから練習しないと……」

結、何かに躓きつんのめって転びそうになる。

一弥「大丈夫？」

結「大丈夫、大丈夫」

× × ×

信号待ちをする結、陸、一弥。

信号が青になり、横断する3人。

結の目の端に黒い何かが見える。

黒い何かに顔を向けると、目の前に車が迫ってくる（ように見える）。

結「危ない！」

結、陸を庇うように身をくねらせる。

一弥「どしたの？」

恐る恐る顔を上げる結。

信号が点滅している。

陸「信号が変わっちゃう」

一弥「陸、走るぞ」

陸が駆け出し、続いて一弥が結の肩を

抱いて横断歩道を渡りきる。

一弥「大丈夫？」

結「大丈夫、大丈夫、ちょっと車にまだ慣れなくて……」

○保育園・教室（朝）

結、陸のお昼寝布団にシートをかけ、押入れに入れる。

教室の中を見て回る結。

壁に園児たちの絵が飾られている。

絵の下にワープロ打ちされた園児の名

前。結、鼻がつくほど近づき、陸の名

前を探す。（結の識字はひらがなとカ

タカナがなんとか拾い読みできるレベル。単語で読むことができない)

「いちきりく」の文字を探し当て、その上の絵に顔を向ける結。

結の視力でも、陸の絵が他の子に比べて下手なのがわかる。

美奈代の声「あ、良かった、まだいらした」

声の方に体ごろ振り向く結。

美奈代が手にファイルを抱えて入ってくる。

美奈代「お母さんにお渡ししたいものがあって、お仕事は大丈夫ですか？」

結「今月一杯、お休みもらってるんで」

美奈代「そうですか、じゃあ良かった。あの、これなんですけど」

一冊のファイルを差し出す美奈代。

結、受け取り、表紙をめくって見る。

美奈代と園児、その母親たちを写真と文字で紹介した手作りのアルバム。

美奈代「先日、お父さんがお迎えの時、見るものと名前が一致しないんだって仰ったので、作ってみました。みんなの顔を早く覚えてもらいなって思いました」

結「(写真を凝視して)……」

美奈代「一木さん？」

結「(ハッとして)ありがとうございます。すごい、嬉しい」

美奈代「もしかして、りっくんの絵、ご覧になってました？」

結「ええ。なんか下手ですよ、うちの子」

美奈代「そんなことないですよ」

結「言葉も他の子に比べると遅いみたいだし、大丈夫なのかな……まあ、絵は仕方ないんです。お絵かきの練習とかさせたことなかったから」

美奈代「園でも絵の描き方は教えませんよ」

結「そうなんですか」

美奈代「子ども達が表現したいことを自由に絵にしてもらいたいからです。どう絵を描くかより、どんな思いで描くかが大切だと

思うんですよ」

結「はあ……」

美奈代「りつくくんって面白い子で、みんながサッカーや鬼ごっこで遊んでも、一人タンポポの綿毛を飛ばして遊ぶんです。綿毛が飛ぶのを本当に嬉しそうに見てるんですよ。りつくくんはまだお友達や保育士に自分の思いや考えを表現するのがちょっと苦手だったりするんですが、りつくんの世界はとっても豊かに育っています」

結「(どこか浮かない表情で) そうだといひんですけど」

美奈代「あ、そうだ、一木さん、11月の生  
活発表会、トマト組さんの劇、『星の王子  
さま』に決まりましたよ」

結「そうなんですかあ」

美奈代「りつくくんが教えてくれたんです。お  
母さんが好きなお話だって」

結「そっか、陸が劇……もう年長さんなんで  
すね、陸も……」

#### ○同・園庭(朝)

結、ぼんやり園庭で遊ぶ子ども達を見  
ている。

ごちゃごちゃと蠢めく色の塊から離れ  
たところにポツンと陸らしき赤いシャ  
ツが見える。

園児たちが遊んでいる。遊具で遊ぶ群  
れ、鬼ごっこする群れなど。

少し離れて一人、土団子を作る陸。

陸、結に手を振るが、結は気づかない。

結「……」

× × ×

美奈代の言葉がリフレインする。

美奈代「みんながサッカーや鬼ごっこで遊ん  
でも、一人、タンポポの綿毛を飛ばして  
遊ぶんです」

× × ×

結「……」

○（結の回想）幼稚園・園庭（25年前）

隠れ鬼ごっこをしている園児たち。

結（5）、隠れていた園児Aに、

結「結もやりたい、結もいれて」

鬼の園児Bに見つかりタッチされる園児A。

園児A「もお、結ちゃんのせいで見つかったやた」

結「結もやりたい」

園児B「結はだめ、目が見えないから」

園児A「結ちゃんがあっち行って、一人で遊んでて危ないから」

結「いいもん、エツちゃんのブス、大っ嫌い!!」

○道（朝）

結がたどたどしい足取りで歩いている。

結、数歩ごとに足を止め、歩道の上の色の違いが目地なのか、車道との境目なのか、段差なのかなど、いちいち確認する。目の前を通り過ぎる車に驚いて小さな悲鳴をあげる結。

前方から帽子にマスクの麻美が来る。

麻美「（鼻声）りつくんママあ!」

風邪で声が変わっているために麻美だとわからない結。

結「?」

麻美「りつくんママ、すごい、手術したって聞いたけど、目が見えてるの?」

結「ああ、うん、でも、まだよく見えなくて、私、変な歩き方してた?」

麻美「（否定）うううん……あ、でもちょっとゾンビ見たいって思っちゃった」

大声で笑う麻美。

結「（苦笑）……」

麻美「って、冗談よ」

相手を識別するため必死に視線を動かして麻美を見る結。

麻美「（結の奇妙な視線の動かし方にたじろぐ）私、ちよっと、風邪引いちゃって病院

行くところさ」

結「あ、そうなんだ……」

麻美「……じゃあ、ね、ごめん。呼び止めちやうって」

結「ううん、じゃあね」

歩き出す結。

麻美、行きかけて振りかえり、結の歩く姿をしばらく見ている。

その好奇の視線を背中に感じながらも、結は一歩ずつ地面を確かめ歩いていく。

○一木家マンション・洗面所

目薬をさす結。目頭を押えて目を閉じる。そして、ゆっくり目を開く。

鏡の中にもやっとした自分の姿。

目や鼻、口など、自分の顔に触れる結。歯を見せて笑顔を作ったりして、鏡の自分と突き合わせる。

○同・リビング

ソファに腰掛け、手作りアルバムを見ている結。

所々に意味をなさない形の輪郭が見えるだけで、どの写真も文字も読みとれない。

結、アルバムを床に放り投げ、ばさつとソファに寝転び、目を押さえる。

○同・寝室（数日後・夜）

ベッドで陸と寝ている結。

玄関のドアの開閉の音が出て、目を覚ます結。

○同・キッチン（夜）

一弥、冷蔵庫から麦茶を出して飲む。

流しに汚れた食器が溜まっている。

結がくる。

結「おかえり」

一弥「ただいま」

結「……ダメだ最近、陸に添い寝するともう

寝ちやう」

一弥「いいのに、寝てて」

結「(流しの食器を見て) だって……」

結、キッチンに入って食器を洗う。

一弥「食洗つけてもらおうか」

結「シヨクセン？」

一弥「食洗機。このマンション買う時さ、結が収納が多い方がいいって付けなかったじやん。今からでも取り付けてもらう？」

結「いいよ、もったいない。お皿くらい自分で洗う」

一弥「うちぐらいだよ、共働きで時短家電一台もないの。乾燥機もロボット掃除機も今、すぐえ安くなってるんだけど」

結「別にあんたが家事してるわけじゃないんだからいいじゃん」

一弥「いやいや、俺、結が入院中、家事やったし。もお、大変だったんだからね」

結「部屋の中、ぐちゃぐちゃにされただけだったけどね」

一弥「……」

結「うそ。ごめん。一弥のおかげで安心して入院できた」

一弥「いいよ、別に……」

結「わかった、考えとく。来週から仕事復帰するし、今みたいのにのんびり家事なんてできなくなるしね。ありがと。早くお風呂入ったら」

一弥「うん……あ、そうだ、人事の遠藤さんが連絡ほしいって」

結「遠藤さん？」

一弥「なんか雇用契約の件で話したいって」

結「うん、わかった。明日、電話してみる」

○同・リビング(日替わり)

スマホで電話している結。

男の声「遠藤は男性の遠藤でしょうか、女性の遠藤でしょうか」

結「それはちよつと聞いてな……」

男の声「あ、お待ちください、恐らく遠藤理



恵の方だと思えます」

保留音が流れ、すぐに若い女の声が出る。

理恵の声「お待たせしました。女性の方の遠藤理恵です。一弥くんの奥様ですよね」

結「（一弥くん？）あ、はい」

理恵の声「すみません、お休み中にお電話いただきまして」

結「いえ、あのそれで、雇用契約の件というのは？」

理恵「一弥くんから色々とお話伺ってまして、一木さん、今回のお休みは有給で取られますよね？」

結「はい」

理恵の声「一木さんは障害者雇用の被用者ですので、治療目的の休暇は傷病休暇が利用できるんですね。こちらは無制限に取得できますよ……」

結「そうなんですか？」

理恵の声「はい。通常は有給を先に消化するよう指導するんですが、一木さんの場合、今回の治療で視力が回復したとなると障害者手帳を返還することになりますよね？」

結「あ、そっか、考えてなかった……じゃあ、雇用形態が変わるってことですか？」

理恵の声「はい、そうなんです。手帳の喪失をもって雇用契約が打切られる、ということはないんですけれども、一般雇用に移行することになります。給料体系などもシフトするんで、有給は移行しますが傷病休暇はなくなるんです。そういった障害者としての配慮はすべて失うことになりますんで、今回のお休みは傷病休暇で申請し直したらどうかかって思いました」

結「あ、でも、やっぱり、先に有給を消化して、足りない分を傷病休暇でお願いしますか……」

○同・リビング（夕）

玩具で遊んでいる陸。

結、ベランダから洗濯物を取り込んで入ってきて、畳みだす。ベランダに何かの気配がして顔を向ける結。

陸がフェンスによじ登っている。

結「！」

慌てて立ち上がる結。

次の瞬間、陸が手を滑らせて落下する。

結「きゃあ！」

陸「落ちちゃったあ」

その声に「？」となる結。

すぐ側に陸がいる。

結「（陸を抱き寄せ）陸！ もう、びっくりした、陸が落ちたかと思ったよお」

陸「タオルがお空から飛んできて、で、風が吹っ飛ばして落っこちちゃった」

結「タオル？ もう、ああ、びっくりした。

まだ心臓バクバク言ってる。陸、もう絶対にベランダで遊んじゃだめだからね」

陸「落っこちたら死ぬかな？」

結「うん。死んじやったらもうママやパパとも会えなくなるんだからね」

陸「わかった。ボク、死なないようにする」

### ○眼科医院・検査室

検査用のメガネをかけ視力表の指標を読む結。看護師Aがレンズをあれこれ装着しそれを繰り返す。

× × ×

医療機器の灯だけの暗室。

細隙灯のアゴあてに顔を乗せ、小山内の検査を受けている結。

小山内「はい、結構です」

看護師Aが照明を点ける。

小山内「目はきれいですし、視力は0・7まで回復します。これなら車だって眼鏡なしで運転できますよ」

結「（浮かない顔）……」

小山内「？」

結「確かに術後に比べたら、はっきり物が見

えるようになった気はします。でも、車の  
運転なんてとても……歩くのだってやつと  
って感じで。それに鼻が……」

小山内「鼻？」

結「みんな、鼻が邪魔じゃないんでしょか。  
自分の鼻が邪魔してモノがよく見えなかつ  
たりする、あ、違うかな、顔を寄せれば見  
えるけど、別のモノを見ると先に見えてた  
モノがかわからなくなつて、とにかくちゃ  
んと見えてる気がしないんです」

小山内「……一木さん、一度、脳神経科を受  
診してみますか。あなたの網膜と視神経は  
正常に活動しています。それでよく見えな  
いとなると、その信号を脳が正しく受け取  
れていない可能性があります」

結「……」

○走行する良美の車・内

結と良美。

結「脳に問題があるつて、あのヤブ医者。私  
の頭がおかしいみたいじゃん。いっそ別の  
病院、探そつかな」

良美「そんな……手術してまだひと月も経つ  
てないんだから、そんな焦らなくても」

結「もうひと月だよ」

良美「……」

結「なんか、目が見えた途端、嫌なことばつ  
かり目につく……」

良美「結、あんたの悪い癖」

結「なに？」

良美「物事が上手くいかなくなると、そうや  
つて目のせいにする」

結「だって仕方ないじゃん。目につくんだも  
ん……」

良美「結さ……」

結「（遮り）私の腰にさ、痣みたいのがあん  
じゃん。あれ何？」

良美「（顔色が変わる）……」

結「？」

良美「木登りしてて落ちた時の傷跡でしょ

う？ 5針縫ったらしいから」

結「やっぱ、前のお母さんの時か」

良美「そうね……小さい頃からお転婆で、体中にアザ作ってたってゆうから」

結「……」

良美「あんた、ちょっと疲れてんじゃない？ そんな昔の傷が気になるなんて。少しゆっくりにしたら？ 陸は私が預かるし」

結「ゆっくりにし過ぎてるほどしてる。仕事もしてないし、目が見えるし、もうなにも障害なんてないんだもん」

### ○同・リビング（夜）

結が知育玩具で様々な立体図形を作っている。

帰宅する一弥。

一弥「ただいま」

結「おかえり」

一弥「何やってんの？」

結「空間認識能力のトレーニング。これ、一弥のお母さんが陸にとって、去年の子どもの日にもらったの覚えてる？」

一弥「そうだっけ」

結「陸、こういうの興味ないから、出してなかったけど、私の目のトレーニングにいいのよ。お風呂わいてるよ」

一弥「うん……」

上着やカバンを床に置き、結の側に腰をおろす一弥。

一弥「結さ」

結「？」

一弥「しばらく会社休んだら？」

結「なんで？」

一弥「今日、人事の遠藤さんとも話したんだけどさ、傷病休暇って、無期限で取れるっていうじゃん。障害者じゃなくなったら使えなくなるんだし、今のうちにがつつり使ってさ、目、ゆっくりに治せばいいじゃん」

結「目を治すって、もう治ってんだけど。だって視力0・7だよ。車だって運転できる

んだから」

一弥「でも、よく見えてないんでしょ」

結「誰から聞いたの？ お母さん？」

一弥「……」

結「やだよ。障害を特権にしたくないし、それにこれ以上休んで、みんなに迷惑かけたくない」

一弥「迷惑なんて誰も思っていないよ」

結「そりゃあ、私なんて、会社にとっては小さな歯車っていうか、お荷物かもしれないけど」

一弥「そういう意味じゃ」

結「……」

一弥「とにかく、少しゆっくりした方がいいよ。どっかで俺も休み取るからさ、一緒に旅行しよ、な？」

結「……」

一弥「風呂、入ってくる」

一弥、奥へ消える。

結、床に落ちた一弥の上着が目に入る。

結「またこんなとこに脱ぎっぱなし……」

結が上着を拾い上げた時、ブルツとポケットが振動する。

結、ポケットからスマホを取り出す。ためらいつつ、ロック画面に表示されたメール通知を見る結。

目を細め、読みとれるのは「リエ」の文字。

結「リエ？」

× × ×

理恵の声「……女の方の遠藤理恵です」

× × ×

一弥「今日、人事の遠藤さんとも話したんだけどさ……」

× × ×

結「(怪訝)……」

○ 駅前のロータリー

一弥が人待ち顔で立っている。

客が改札口に流れてくる。

出てきた若い女が一弥に駆け寄り、二人、手をつないで歩き出す。

陸の声「パパは？」

一弥の顔が別人になり、見知らぬカップルが結と陸の前を通り過ぎる。

結「仕事だった」

陸「日曜日なのに？」

結「日曜日なのにね」

結と陸、タクシー乗り場へ向かう。

○脳科学総合研究センター・全景

○同・センター長室

ソファに座る一弥。

奥で堀江宗一（64）がコーヒーを淹れている。

一弥「すみません、突然、押し掛けてしまつて」

堀江「いえいえ、こちらこそ休みの日しか時間が取れなくて申し訳ない」

堀江、2つのコーヒーカーップを持ってきて、一つを一弥に差し出す。

一弥「（萎縮気味に）すみません、ありがとうございます」

堀江「そう言えばお父さん、宝塚に移住したんだって？」

一弥「あ、はい」

堀江「年賀状見て、驚いたよ」

一弥「実はこの週末、法事で東京に出てきているんです」

堀江「あ、そう。元気だった？」

一弥「今夜、久しぶりに会うんですけど」

堀江「じゃあ、よろしくって伝えといて」

一弥「はい」

堀江「でも、またなんで急に宝塚なんかに移住したわけ？」

一弥「独身の時、神戸支店に勤務してたことがあって、よく宝塚歌劇を見に行ってたらしんです。それで街が気に入って、いつか住みたいってずっと考えてたらしくて」

堀江「あ、そう。それで銀行を早期退職か」  
一弥「そうなんです。同じ銀行マンの兄には  
相当反対されましたけど」

堀江「ああ、だめだめ、あいつは周囲から反  
対されるほど燃える奴だったから。君のお  
母さんと結婚する時もそうで……」

一弥「え、そうなんですか？」

堀江「あ、今のは聞かなかったことにして」

一弥「（苦笑）あ、はい」

堀江「ええっと……小山内先生とも少し電話  
で話すことができました、ご本人は乗り気  
でないようだけど、先生に紹介状を出して  
もらって、一度、こちらで検査してみまし  
よう」

一弥「やはり脳に何らかの障害があるという  
ことなんでしょうか」

堀江「うん……モノを見るってね、目が見え  
れば見えるなんて、単純なことではなくて、  
見えてる世界がそのままそこにあるわ  
け  
じゃないんですよ。例えば……」

堀江、電子顕微鏡で撮った拡大像の写  
真を一弥に見せる。

堀江「これ、なんだかわかるかな」

一弥「（意味不明）……」

次に別の拡大像の写真を見せる堀江。

堀江「これはどう？」

一弥「脳の断面図か何かですか？」

堀江「そう。実はこちら（前者）も、脳のあ  
る部分を電子顕微鏡で撮ったものなだけ  
ど、君はこちら（前者）は何だかわからな  
くて、こちら（後者）は脳の断面図だとわ  
かった」

一弥「はい」

堀江「どうしてわかったのかな？」

一弥「似たような写真を見たことがあったん  
で」

堀江「そう。つまり、過去に似たような写真  
を見たことがあってその知識をもとにこれ  
（後者）は脳の断面図だと予想した。しか  
し、こちら（前者）は予想できるだけの予

備知識がなかったのでわからなかった。要するに知識と予想を土台にしてモノを見て、見ないということもする。奥さんは鼻が邪魔でよく見えないと小山内先生におっしゃったそうですが、確かに自分の鼻はいつも視野に入っているから見えるはずだよ。しかし、普通は見えない。それは脳が不要な情報として排除するからでね、普通の晴眼者ならモノを見るのも見ないのも大した努力はいらない。生まれたときからそのようにして世界を捉えてきたんだから」

一弥「……」

堀江「赤ん坊の時から目に映るものに触れて、五感を総動員させて、我々は世界を学んできたから見えるんですよ。人生のずっと後になって視力を失った患者なら、見るための能力はすでに備わっているんだから、手術して目の機能を取り戻せれば済む。しかし、奥さんは違う。わずかな視覚経験があるので、色や動きは見えたかもしれない。けれど世界はそれだけじゃないからね。奥さんが見ている世界はこんな（前者）意味不明な色と形の集合体なんですよ」

一弥「それで、改善する方法はあるんでしょうか」

堀江「検査してみないとわかりません。脳というのは可塑性がありましてね、柔軟に変化するんです。奥さん、点字を読んだり、音源定位で空間を把握したりするでしょう」

一弥「あ、はい」

堀江「おそらく視覚野として機能する部位が使われなかったことで、聴覚や触覚に拡大されているはずだ。使われてなかった視覚野に新しい回路がつながるかどうかを検査するんです」

一弥「そういうことなら、はい、検査を受けるよう妻に言います……」

堀江「検査もそうなんですけどね、カウンセセリングも同時に受けてもらった方がいい」

一弥「カウンセセリング……」



堀江「心のケアです」  
一弥「……」

堀江「幼くして視力を失った奥さんの脳は視覚に変わる能力を発達させて、目の見えない環境に適応してきた。それを今度はその逆の作業を脳にやらせなきゃならない。その転換は、今までの奥さんの人生にまっとうから対立するものになりますから」  
一弥「……」

○ホテル・ロビー(夕)

ソファで座る結と陸。

初老の夫婦・一木隆明(65)と一木

曜子(62)が近づいてくる。

陸が二人を見る。

陸「ママ」

結、立ち上がり一木と曜子に会釈する。

曜子「結さん、あなた本当に目が？」

結「はい、大変ご無沙汰してます」

曜子「(感激して言葉がでない)……」

隆明「あ、誰かなそこに隠れているのは？」

陸、結の後ろに隠れている。

曜子「陸くん、うわ、久しぶりに会ったら、

まあ大きくなって」

結「ほら、陸、ご挨拶してお祖父ちゃんとお祖母ちゃんに、ねえ」

陸、恥ずかしくて結の後ろから出てこない。

曜子「陸くん、お祖母ちゃんね、お土産買ってきたのよ、はい」

包装紙の箱を陸に差し出す曜子。

結「うわあ、すごいねえ、陸。ほら、ありがとうは？」

陸「……」

結「すみません」

隆明「お前もこんなところでいきなり渡さなくとも……」

曜子「だって……」

子どもの声「おじいちゃん、おばあちゃん！」

と、沙耶(8)、優斗(5)が駆けて

来る。

そのあとから一木孝博（40）、早苗（38）が来る。

優斗「おじいちゃん、おばあちゃん、お久しぶりです」

曜子「上手にご挨拶できてえらいわね、優ちゃん」

結「……」

○ステーキハウス・店内（夜）

L字の鉄板焼きカウンター。結たちの前でシェフが調理している。

奥に一つ空席があり、孝博、一木、結、陸、優斗、沙耶、曜子、早苗の順で座っている。

軽快な手さばきで食材を調理するシェフのパフォーマンスに一同、釘付け。

結だけが顔を硬直させている。

シェフが酒を注ぎ、フランベの炎が勢いよく上がる。

結「きゃあ！」

炎に包まれた気がして悲鳴を上げる結。

一木「大丈夫？」

その場が一瞬で白けムードになる。

結「あ、すみません、ちょっとお手洗い」

陸「ママ？」

結「ごめん、陸、ちょっと待ってて」

結、立ち上がる。

× × ×

結、目の前を横切る人影を引き止め、

結「すみません、お手洗いは？」

人影「私、店員じゃないんで」

結「ああ……」

結、おぼつかない足取りで進み、別の人影にぶつかる。

結「すみません」

人影「大丈夫ですか？ お客様」

結「すみません、お手洗いは？」

○同・トイレ（夜）

真っ暗なトイレ。

結、便座の蓋に腰を下ろし、大きな溜息をつく。

しばらくして、誰かが入室した音がして電気が点く。

○同・席(夜)

食事をしている一木家の人々。

孝博「結さん、気に入らなかったかな」

早苗「もう少し、静かなところがよかったんじゃない」

孝博「せっかく見えるようになったんだから、見て楽しい方がって……」

結が戻ってくる。

結「あれ、もうパフォーマンス終わっちゃいましたね」

曜子「結さん、大丈夫？　なんだか顔色悪いけど」

結「大丈夫です。すみません、白けさせてしまつて。大丈夫なんです。(優斗の付け合わせだけが残った皿を見て) うわ、美味しそうですね、優斗くん」

優斗、きよんとんとしている。

席につく結、何があるかを見定めようと皿に顔を近づける。

陸「ママ」

結「陸、美味しい？」

陸「(小声で) 帰りたい」

結「(小声で) そんなこと言わないの。もうすぐパパ来るし」

一木「今日、一弥は仕事？」

結「そうなんです。7時までには来れるって言ってたんですけど」

一木「(腕時計を見て) あいつのことだから時間通りに来ることはないと思うけど」

結「(苦笑) そうですね……、あ、お義父さん、どうですか。宝塚の生活は」

一木「ああ、のんびりやってますよ。犬を飼いはじめたって話したかな？」

結「そうなんですか？」

一木「ずっと社宅暮らしだったんでね、ペットが飼えなかったんで。毎朝の犬の散歩が楽しくてね」

陸「なんて名前？」

一木「(陸に)ラッキーって言うんだ。今度、宝塚に遊びにいらっしやい。お気に入りのお散歩コースに案内してあげるよ」

結「散歩コース、ですか？」

一木「国鉄時代の古いトンネルがさ、通り抜けできるんだよ。中に入ると真っ暗で何も見えなくて、ラッキーはさすが犬でさ、平気な顔して歩いてるんだよね。ま、暗くて見えないからどんな顔してるかわかんないんだぞ(笑)」

孝博「一弥、ここ」

店の入口できよろきよろしている一弥に手招きする孝博。

一弥、結たちの席にやってくる。

一弥「うお、父さん、母さん、久しぶり、お姉さんも相変わらずおキレイで」

早苗「やめてよ一弥さん」

沙耶・優斗「こんにちわ」

一弥「おお、沙耶と優斗、お前ら、デカくなったなあ。陸も食ってるか？」

孝博「お前が早めがいいって6時に予約したのにさ、遅刻してんじやねえよ」

一弥「まあまあ、怒らないでよ」

結「(一弥の変なテンションに怪訝な表情)……」

○一木家マンション・玄関(夜)

結、陸、一弥が帰宅する。

結「ごめん、陸、お風呂にいられてくれる？」

一弥「あ、うん」

そっけない態度の結。

○三葉商事・廊下(日替わり)

仕事の合間、スマホで話す一弥。

一弥「……相当疲れてるみたいで、昨日も帰ったらすぐに寝ちゃって、今朝も起きてこ

なくて……」

○笹川家・庭（朝）

携帯を肩に挟み話す良美、花壇の水や  
りを止め、縁側に腰を下ろす。

良美「そう……わかった。ちよつと様子見に  
行ってみる」

○秋の夕暮れの色鮮やかな空に鳥の群れが飛  
ぶ

○笹川家・居間（夕）

結、大きな掃き出し窓から、庭で遊ぶ

陸と笹川をぼんやり見ている。

西空がうすい墨色に変わっていく。

良美はキッチンで夕飯の準備。

陸が駆けてきてガラス戸を勢いよく開  
く。

陸「ママ、見て！ トカゲ、つかまえた！」

虫かごに入ったトカゲ。

陸「おうちに持って帰っていい？」

結「そんな、だめだよ」

陸「なんで？」

結「逃がしてあげなよ、可哀想じゃん」

陸「ボクのだもん、ボクがお家で飼うの」

結「無理」

陸「なんで？」

結「だって、エサとかどうすんの？」

陸「ミミズとか小さい虫とか食べるって、じ

いじが言ってた」

結「そんなのどこにあるのよ」

陸「お庭にいっぱいいるよ」

結「無理だよ」

陸「無理じゃないもん」

結「無理だよ。陸、自分でお世話しないじゃ  
ん、いつもママにさせるくせに」

陸「するもん」

結「しない」

陸「する！」

笹川「そんな、トカゲぐらいでカッカしなく

ても……」

結「もうお父さん、またこんな変なもの陸に採らせないでよ」

笹川「変なものってお前……」

結「(陸に)捨ててきて」

陸「いや！」

結「あんたさ、おうちに一杯おもちゃあるでしょ。遊ぶもの一杯あんじやん。昨日、お祖母ちゃんからもらったおもちゃだってまだ箱から出してもないでしょう」

陸「だって、面白くないもん……」

結「お祖母ちゃんが買ってくれたものだよ」

陸「買ってって言ってないもん！」

結「そんな気持ち悪い虫なんかで遊んでないでさ……」

陸「虫じゃないトカゲ！」

結「虫もトカゲも同じ」

陸「同じじゃない！」  
結「とにかく、トカゲは飼いません。普通に遊んで」

陸「普通って何？」

結「お友達とサッカーしたり、みんなと同じように遊ぶってこと」

陸「ママは普通じゃない！」

結を諷めるように指を差す陸。

結「……」

良美が来る。

良美「はいはい、もう終わり。結もさ、子ども相手にそんなにムキになってどうすんの」  
結「別にムキになんて……」

良美「(陸に)トカゲは、ばあばんちでばあばと一緒に飼おう」

陸「やだ、ボクのトカゲだもん」

結「なによ、いっつも偉そうに。なんでもわかったような顔して……」

良美「……」

結「私、お母さんにそんなふうには優しくしてもらったことないから。いっだって怒ってたじやん。自転車でも泣いても、道に迷って泣いてたって、一度だって優しい

言葉かけてくれなかつたくせに」

良美「やめなさい、子どもの前で」

結「なによ、自分は子ども、生んだことないくせに……」

笹川「やめろ！ もういい」

良美「いいのよ、お父さん。この子はわかってるから。自分がどんなこと言ったか、この子はわかっているから……おいで、陸、ばあばと一緒に風呂に入る」

結「……」

○走行する車内（夜）

運転している笹川。

結。無言。

○笹川家・風呂（夜）

良美と陸、湯船に浸かっている。

良美「ママは新しいお目々にまだ慣れてないから、もう少し、新しいことをするのに時間が必要なの。ママの目がよくなったら、きつとお家で飼ってもいいって言ってくれよ」

陸「ほんと？」

良美「ほんと。だからそれまで、ばあばがトカゲを預かってあげる。もちろん、陸のものだから、陸がちゃんと世話するのよ」

陸「うん、する」

良美「毎日エサをやって、毎日可愛がってあげるの」

陸「うん、可愛がる」

良美「トカゲは陸よりずっと小さくて弱いから、陸がいないと生きていけないの。ちゃんと育ててあげてね」

陸「うん」

陸の笑顔にふっと良美も笑みになる。

○同・脱衣所（夜）

良美、陸の頭をタオルで拭いている。

陸「ばあば」

良美「なあに？」

陸「ママを育ててくれてありがとう」  
良美「……」

陸の頭を拭くタオルが止まる。

無言。

良美、泣いている。

○走行する車内（夜）

結と笹川。

結「ねえ、お父さん」

笹川「ん？」

結「私って、お母さんに似てる？ 私を生ん

だ方のお母さん」

笹川「……うん、まあ、外見は母親似だな」

結「子どもの頃さ、お祖母ちゃんにも同じ質問したんだよね。そしたらすごい剣幕で似るわけがないって否定されて。あんな鬼み  
たいな女って。私に聞こえないように言っ  
たつもりなんだろうけど、聞こえたの」

笹川「……」

結「私さ、お母さんに虐待されてたでしょ」

笹川「……」

結「いいよ、隠さなくて」

笹川「……」

結「もういい加減、教えてよ。隠されてる方がよっぽどやなんだけど」

笹川「……お父さんが悪かったんだよ」

結「……」

笹川「お前たちを二人つきりにしたから」

結「どういうこと？」

笹川「お前が2歳の時だ。俺の仙台赴任が決まって、でもお母さん、会社に復帰したばっかりで結の保育園も決まったとこで……  
あの時、無理にでも仙台に連れてってれば……」

結「それで？」

笹川「全部、あとからわかったんだけど、お前の体にいつも痣や傷があったりして、お母さん、保育園から要注意人物になってたらしい。事故の知らせを聞いて病院に行ったら、お母さん、結に泣きながら謝ってた



……そのあと、警察が来て……うちの家に  
さ、前のオーナーが農具置き場にしてた古  
い小屋があつて、そのうち取り壊そうなん  
て話してたんだけど、そこに、時々、結を  
閉じ込めてたらしい」

結「……」

笹川「みんなに同情されて、どこ行っても腫  
れ物扱いで、普通に接してくれたのは良美  
だけだった。彼女がお前に厳しくしたのだ  
って……（遮られ）」

結「わかっているよ。お母さんのことは私が一  
番わかっている……もういい、もう何も言わ  
ないで」

○一木家マンション・リビング（夜）

真っ暗な室内に玄関の開閉する音。

一弥が入ってきて、灯をつける。

結が洗濯物を畳んでいる。

一弥「うわ、びっくりした」

結「おかえり」

一弥「どうしたの？ 陸は？」

結「ばあばんちにお泊まり。ご飯は？」

一弥「結たち、お母さんところで食ってくるか  
なってるって、適当に済ませた」

結「どうして？」

一弥「？」

結「私がいつお母さんところに行くって言っ  
た？」

一弥「え？ だって……え？」

結「一弥さ、なんか、隠してない？」

一弥「何を？」

結「ねえ」

一弥「？」

結「リエさんって誰？」

一弥「リエさんって誰？」

結「質問で返すな。メール来てたじゃん」

一弥「メール？ お前、俺のスマホ見たわ  
け？」

結「あんたがその辺に、ほっぼりだしてるか  
ら、たまたま見えたんだよ」

一弥、スマホを検索する。

結「相手は鈴木理恵さん？」

一弥「誰それ？」

結「人事の若い女」

一弥「人事……」

結「日曜も仕事とか言っつて、今日もどうせその女とご飯食べてきたんでしょ？」

一弥、該当するメールを発見。

一弥「（ふっと鼻で笑い）それさ……」

結「（遮り）別れよう」

一弥「はあ？」

結「誰も一弥のことなんて責めないよ。私みたいな欠陥品を面倒みてきたんだから、少しは箔もついたのでしょう」

一弥「なんだそれ。お前、人をバカにしてんのか」

結「電気消して」

一弥「はあ？」

結、立ち上がり、リビングの電気を消す。

暗闇の中、洗濯物を畳む結。

一弥「言っとくけど、人事の鈴木さんって50過ぎのおばちゃんだから。あとこれ、見るよ」

一弥、ぽいっとスマホを結の足元に投げ  
げる。

一弥「お前が見たのってそれでしょう？ リ  
エじゃなくてホリエだよ。堀江先生。親父  
の高校の同級生で、脳科学専門のドクター。  
日曜にしか時間取れないって言うから、結  
のこと相談しに行ったの」

結「……」

憤然と部屋を出る一弥。

結、暗闇でスマホの画面を見ている。

○脳科学総合研究センター・表（数日後）

一弥と結が来る。

結、躊躇いがちに足を止める。

一弥「結」

一弥に促され再び歩きだす結。

○同・検査室

堀江から説明を受ける結と一弥。

堀江「これから受けていただくfMRIというのは、磁気の利用して脳の血流動態反応を診るための検査です」

堀江、脳や神経細胞の模型を手に取り説明する。

堀江のN「脳を構成する主役がこの（神経細胞の模型）神経細胞ですが、人の脳には千数百億個の神経細胞がありまして、ひとつの神経細胞から伸びた突起が別の神経細胞とつながって複雑なネットワークを形成しています。それぞれの神経細胞はほかの神経細胞から電気信号を受け取り、それを次の神経細胞に伝えることで情報を処理します。人間特有の高次機能の多くは（脳の模型を指し示し）脳の表面、大脳皮質で処理され、それぞれ役割によって反応を示す領域が分かれます。例えば視覚は赤色のこの部分、聴覚はブルーといった感じで特定の場所に集中して分布されているんです」

○同・fMRI検査室

検査技師の指示で検査台に乗る結。

結、台に手を這わせ、それが何なのか確かめるようにして横になる。

× × ×

検査技師が制御室で機器を操作する。

その横に一弥と堀江の姿がある。

結を乗せた検査台が装置の円筒の中に入っていく。

× × ×

検査装置の中。

装置がガシャガシャと音を立て回転し、結の目の前にあるスクリーンに様々な画像を表示する。

堀江のN「装置の中で一木さんには人の顔や図形など様々な画像を見られます。それらを見た時の脳の反応を測定します」

○同・検査室

検査技師と話す結。

担当者「検査結果が出ましたらセンター長の堀江からご連絡させていただきます」

○同・センター長室（夜）

読書灯だけの薄暗い部屋。

一人机につき資料を読んでいる堀江。

卓上に山と積まれた資料。

資料から目を離し目の前のパソコン画面を見る。

画面に表示された結のfMRI映像をじつと見つめる堀江。

○一木家マンション・リビング

テーブルで小学生向けのドリルを使い、ひらがなの練習をしている結。

傍らのスマホが鳴る。

「ホリエ」の文字。

○脳科学総合研究センター・センター長室

（数日後）

堀江と向き合う結と一弥。

傍らのパソコン画面にfMRI映像。

堀江「率直に申し上げて、一木さんの視覚野は一部を除いてその大部分が聴覚や他の目的に利用されていて、本来、視覚情報を処理するはずの神経細胞は機能していませんでした」

一弥「一部というのは？」

堀江「色や動きなどを見て取る機能です」

結「……」

堀江「残念ながら、普通にもものを見るために必要な神経細胞はもう利用できない状態になりました」

一弥「ですが、脳は柔軟だって先生おっしゃいましたよね。時間をかければそれに対応する回路がつながる可能性はあるんですね？」

堀江「幼い子どもであれば十分可能です。しかし、成人後に死滅した機能が突然回復するとは考えられない。私も今回のことで、いろいろ古い症例記録などを読み直してみました。一木さんのように早期失明者が長期間視力を失い、大人になってから視力を取り戻したという症例は世界的にみて非常に少なくですね、その中で正常な視覚を取り戻した患者は一人もいませんでした」

結「それって、つまり……」

一弥「……」

堀江「……」

結「一生、このままだったことですか？」

堀江「……」

結「見えてるのに、どんなに努力してもどんなに頑張っても、一生、他の人と同じようには見えないってことですか？」

堀江「科学者としては、そうです、としかお

答えできません」

結「……」

堀江「残念ですが」

○同・センター長室の前の廊下

堀江に見送られ、部屋から出てくる結と一弥。

結、ひとりだとぼとぼと歩き出す。

一弥、堀江にお礼を言って頭を下げる。

一弥、結に追いつき、その手を握って歩き出す。

○笹川家・居間（夕）

夕飯の支度を中断し、スマホで話す良美。

良美「そう……で、結は？」

一弥の声「帰ってからずっと寝てます」

良美「……」

遠くから「ただいまぁ」と元気の良い

陸の声。

良美「あ、陸が帰ってきたみたい。（陸に）

陸、パパから、電話」

陸、部屋に駆け込んできて、良美からスマホを受け取る。

陸「パパ、じいじすごいんだよ。ミミズ3匹捕まえたの。ピーちゃんのエサ」

一弥の声「ピーちゃん？」

陸「トカゲのピーちゃん」

一弥の声「トカゲなんだ。もう少ししたら、

パパが迎えに行くから」

陸「うん、わかった。ばあば、代わって」

良美にスマホを返し、トカゲの入った

虫かごを嬉しそうに見つめる陸。

複雑な表情で陸を見る良美。

○一木家マンション・寝室（夜）

一弥、陸に添い寝で絵本を読んでいる。

一弥「すると、恐竜は悲しそうに……」

すでに陸は寝ている。

一弥、そっとベッドを抜け出し、消灯

して部屋を出る。

○同・リビング（夜）

窓の外は雨が降っている。

和室。頭まで布団をかぶり寝ている結。

一弥が来て、

一弥「結、陸、寝たから」

結、ぴくりともしない。

一弥「……」

○激しく地面を叩きつける雨（深夜）

○一木家マンション・寝室（深夜）

ガラガラとガラス戸が開く音。

陸が目をさます。

隣で一弥が軀をかいて寝ている。

陸、一弥の体を乗り越えてベッドから

おりる。

○同・廊下からリビング（深夜）

雨の音。

陸、リビングのドアを開けて中に入る。

雨音がさらに大きくなる。

陸「ママ？」

和室に乱れた空っぽの布団。

ベランダの掃き出し窓が開いている。

その向こうに結が立っている。

陸「マ……」

言いかけた時、室内に強い風が吹き込み、カーテンを大きく膨らませ陸の視界を遮る。

と次の瞬間、ばさつと鈍い音がして、

陸がベランダに出ると結がいない。

陸「ママアアア！」

悲鳴のような陸の叫び声。

陸、「ママ、ママあ」と泣き叫びながら、フェンスの下を覗き込む。

漆黒の闇に包まれ何も見えない。

そこへ一弥が血相変えて来る。

一弥「陸！」

陸「ママが、ママが……」

一弥「ママがどうした？」

陸「ママが落ちた」

一弥「落ちた？」

一弥、フェンスに身を乗り出し下を見る。

一弥「陸、お前、部屋の中に入ってる、絶対に外に出るんじゃないぞ」

陸「パパア」

部屋に引き返す一弥。

玄関のドアが開き、閉まる音。

陸「ママ……ママあ」

しゃくりあげながら泣いている陸。

○同・表の通り（深夜）

結を乗せた担架が救急車に運ばれていく。

一弥、傘をさした女に陸を預け、

一弥「すみません、お願いします」

陸の肩を抱き、うんうんと頷く女。

一弥が救急車に乗り込むとドアが閉まり、発車。

陸、女の手を払いのけ、救急車を追いかけて走り出す。  
追いつくわけもなく、どんどん距離が離されて、追いかけてきた女に引き止められる陸。

○救急病院・治療室（深夜）

担架からベッドに移される結。  
医師Bや看護師Dが治療にあたる。  
ガラス越しに不安げに見ている一弥。

○同・治療室の前の廊下（深夜）

時間経過。

医師Bから説明を受ける一弥。

医師B「酔って身体が弛緩していたことと、地面が雨でぬかるんでクッション代わりになったのが幸いでした。3階から落ちて、打撲と擦り傷で済んだのは本当にラッキーです。酒を大量に摂取したようなので今は眠ってます」

○同・病室（深夜）

ベッドで眠る結。点滴。  
傍らで凍ったように座る一弥。

○笹川家・座敷（朝）

布団で寝ている陸。  
襖が静かに開き一弥が入ってくる。  
陸、顔だけ一弥の方に向ける。  
一弥「陸？ 帰ろっか」  
陸、首を振り、一弥に背中を向ける。

○同・居間（朝）

良美、笹川。  
一弥が入ってくる。  
良美、笹川「（一弥を見て）……」  
一弥、静かに首を振る。

○保育園・園庭／教室

園庭で遊ぶ園児と保育士たち。



教室ではスモック姿の園児たちが絵を描いている。

壁に飾られた工作物、色分けされた棚に整理された園児たちの荷物など、名前付けされた様々なもの。

クレヨンで絵を描いている陸。そのクレヨンの名前シールが剥がれかけている。

陸のM「世界にはたくさんたくさん見えるものがある。だから全部におなまえシールをつけないと誰のものかわかんなくなる」

名前シールを剥がして机に貼る陸。

陸のM「でも机はボクのじゃない」

○草むら

バツタを追いかけている陸。

陸、バツタを掴まえてトカゲの入っている虫かごの中に入れる。

陸のM「バツタさんは地球のものだけど、ぼくが掴まえたからボクのもの」

トカゲがバツタを食べている。

陸のM「でも、ぴーちゃんの餌になったからぴーちゃんのもの。ぴーちゃんはボクが飼ってる大事なトカゲさん。おなまえシールがなくっても見ればわかる。だってボクのものだから。ママは変な目ん玉に取り替えたいせいで、何にも見えなくなったんだ。ぼくが見えなくて、パパが見えなくて、もうこの世界がいやになって逃げ出した」

○救急病院・病室（夜）

ベッドで目を覚ます結。

ぼんやりとした視界。

左手につながった点滴。

少し身体を動かすと全身に痛みが走る。

右手に何かが触れる。

突っ伏して寝ている一弥の髪。

結、一弥の頭を撫でる。

頭をもたげ結を見る一弥。

× × ×

一弥、スープの乗ったスプーンを結の口に運ぶ。食べる結。

無言でそれを繰り返す一弥と結。  
しくしく泣きだす結。

一弥「不味い？」

結、うなづく。

一弥「なんか買ってこようか？　アイスとか  
ヨーグルトとか」

結、首を振る。そして、口を開ける。

結の口にスープを運ぶ一弥。

結「私のこと嫌いになった？」

一弥「別に……」

結「ご飯、ちゃんと食べてる？　菓子パンば  
つか食べてない？　シャツ、洗ってないで  
しよう。なんか匂う」

一弥「別にいいでしょ」

結「……」

一弥「毎日、ジャンクフード食って、毎日、  
汚れた服着て、クソまみれの生活でいいじ  
ゃん別に、死ぬわけじゃあるまいし」

結「……」

一弥「……」

結「陸は？」

一弥「ばあばのそこ」

結「……」

一弥「……」

結「最低な母親だね、私……」

一弥「うん、そだね、嫁としてもね」

結「……」

一弥「……でも、陸のママだし、俺の嫁だし、  
それで最高なんじゃない？　それをさ……  
勝手に……なかったことにしようとかやめ  
てよね」

泣きながら訥々と訴える一弥。

○走行する良美の車内（数日後）

良美と陸。

陸「ねえ、ママ、いつ帰って来るの？」

良美「体のケガはね、よくなったんだけど、  
別の病院で心が元気になるように治療して

もらうんだって、もう少し、一人にしてあげようね」

陸「うん、わかった」

良美、安堵して微笑む。

陸「ママが帰ってきたらさ、ばあばんちにお引越しいいい？」

良美「お引越し？」

陸「ママとパパとぴーちゃんとみんなであればあばん家に住むの」

良美「陸が住んでたお家は？」

陸「もういない」

良美「……」

○笹川家・リビング（夜）

陸、ソファでテレビを見ている。

テーブルでお茶を飲む笹川と良美。

良美「あのマンションに帰りたがらないのよ。

一弥さんも仕事忙しいだろうから、結が退院するまでこっちで預かろうと思って」

笹川「よっぽどショックだったんだろう。母

親が落ちるのを見たんだからな」

良美「……」

○保育園・ホール（1ヶ月後）

保育園の生活発表会。

「星の王子さま」の劇。

客席で見ている笹川と良美。

隣りに2つの空席。

美奈代の声「王子さまが長いこと歩いていると、バラの花がたくさん咲き誇る庭に出ました」

美奈代のナレーションとともに、舞台  
上手から王子さま役の園児、下手から  
大勢のバラ役の園児が登場する。バラ  
役の一人が陸。

良美が「陸よ」と笹川の耳元で囁く。

王子さま「こんにちは」

バラたち「こんにちは」

王子さま「君たちはだれ？」

バラたち「私たちはバラです」

王子さま「ぼくのバラは世界に一つだけしかないと思ったのに、こんなにたくさんバラがある」

バラ1「君はたった一つのめずらしい花を持つていたと思つてたけど」

バラ2「君はあたりまえのバラの花を一つ持つてただけ」

バラ3「君が持っているのは小さな火山と」

バラ4「あたりまえのバラ一つ」

バラ5（陸）「それだけ」

バラたち、下手へ消える。

王子（泣く）「えーん」

美奈代の声「王子さまが草の上で泣いていると、そこへキツネがやってきました」

上手からきつね役の園児が登場。

きつね「こんにちは」

王子さま「こんにちは、君はだれ？」

きつね「ぼくはキツネだよ」

王子さま「ぼくと遊ばないか？　ぼく、とってもかなしいんだ」

きつね「あんたとは遊べない。だって、ぼくはあんたと仲良くなつていないから」

王子さま「仲良くなるつてどういうこと？」

きつね「絆をつくりだすつてことだよ」

一弥と結が会場に入ってくる。

一弥、良美らの姿を見つけると、結の手を自分の腕に絡ませ、観客の間を通つて良美の隣りの席につく。

結「（小声で良美に）陸、出た？」

良美「（小声で）このあともう一回出番がある」

舞台。

きつね「もう一度、バラの花を見にいつてごらん。あんたのバラが、世の中に一つしかないことがわかるよ」

舞台の下手から再びバラ役の園児たち

登場。

陸、客席に結の姿を見つける。

結、陸の視線を感じ、舞台に向かって小さく手を振る。

陸、小さく手を振りかえず。

王子さま「君たちはぼくの花とは違う。同じバラだけど、ただ咲いているだけ」

バラ1「君はわたしに水をかけていない」

バラ2「君は私におおいガラスもかけていない」

バラ3「君は私についた毛虫をとってない」

バラ4「君は私と仲良くしてない」

バラ5（陸）「絆は目に見えないから、つくり出すにはコツがある」

きつね「心でみなくっちゃ、大切なことは目には見えないから」

○同・ホール前の廊下

劇を終えた園児たちがぞろぞろと廊下

へ出てきて、各々の家族に迎えられる。

結と一弥も陸を待っている。

出てきた陸、結を見つけて駆けてくる。

結に抱きつく陸。

陸を強く抱きしめる結。

○同・園庭

結と陸がブランコに乗っている。

結「ごめんね、陸」

陸「うん……ママ、元気になった？」

結「うん」

陸「目ん玉はそんなに元気じゃないんですよ」

結「そうだね」

陸「……でも、ボクは見えたでしょ」

結「うん、陸は見えた」

陸「じゃあ、大丈夫だよ」

結「うん、そうだね、大丈夫だね」

陸「……」

結「陸、ずっとばあばんちにいるんだって？」

陸「うん」

結「ママとお家に帰ろう？ 陸とパパとママのお家に」

陸「……」

結「ママね、ベランダにお庭を作りたいん

だ」

陸「お庭？ ばあばんちみたいな？」

結「ばあばんちみたいなお庭ってわけにはい  
かないけど、小さくてもいいから自分の庭」

陸「……」

結「ベランダにね、土を運んで、種を蒔いて、  
球根も植える。そしたらさ、朝起きるとお  
庭が呼ぶの。ママ、のどが乾いたよ、背中  
がかゆいよ、髪の毛切ってよって。ママは  
お庭の植物たちに水をやって、葉っぱにつ  
いた虫を取って、古くなった枝を切ってあ  
げる。立派な植物園に行かなくても、ママ  
の庭に咲いた小さな花がママに全部見せて  
くれる。花は水がないと育たないでしょう。  
その水は雨が運んでくれて、雨は雲がふら  
せてくれる。雲は太陽の熱の力で作られる。  
そんな風に見えないものをひとつひとつマ  
マは見つけたすの。そういうお庭を作りたい  
いの。陸も、そんな自分の庭、作りたくな  
い？」

陸「（少し逡巡）うん……」

結「（陸の顔を覗き込み）？」

陸「ちよつと作りたい」

結「だと思った（笑）」

○一木家マンション・リビング／ベランダ  
（数日後）

一弥と陸がプランターや土など園芸用  
品を運び込み、結がベランダでそれら  
を受け取って並べる。

× × × ×

結と陸がプランターに軽石を敷き、一  
弥が土を入れていく。

× × × ×

種を撒く結。

一弥の指示で球根を植えていく陸。

× × × ×

結と陸、じゃれあいながら寄せ植えの  
鉢を作る。

× × × ×

一弥が水槽をベランダの隅に設置する。  
陸が中に腐葉土を入れる。

○同・リビング（朝）

ベランダの結が目を閉じて洗濯物を干している。部屋に戻り、目を閉じたまま掃除機をかける。

陸が開いたドアから顔だけ出して、忙しく働く結を見ている。

陸のM「ママはときどき目ん玉だけ眠らせて、大忙しでお仕事をする。その方が見えるからって」

○同・ワークスペース（日替わり）

一人机につく結。

パソコンのキーボードと点字ディスプレイを器用に使い分け、フランス語の資料を翻訳している。

ぼそぼそとフランス語をつぶやく結。

陸のM「お家のお仕事だけじゃない、お外のお仕事もお家ですることになって、前よりおこりんぼうが小さくなった」

○駅の構内（日替わり）

点字ブロックを白杖をついて歩く結。

よそ見しながら前から歩いてきた男を怒鳴りつける結。

陸のM「3本足で歩く時は、やっぱり口から百万度の火を吹く」

○一木家マンション・ベランダ

腐葉土の入った水槽に「びいちゃん、とうみんちゆう」の札。

陸、腐葉土に霧吹きで水をかける。

その流れで空中に水を吹きかける。

太陽の光の反射で虹ができて、すぐに消える。

陸のM「世界にはたくさん見えないものがある。見えてるものに隠れているから見えない。だから、冬眠中のピーちゃんは見えな

い。虹は、見えるものかな？ 見えないものかな？」

○同・リビング

部屋の隅にクリスマスツリー。

ブロックで遊ぶ陸と結。

結「ねえ、陸、お正月どっか行こっか。行きたいところある？」

陸「うん、ある」

結「どこ？」

陸「何も見えないトンネル」

結「何それ」

× × ×

(時間経過・夜)

帰宅した一弥、結に上着を渡し、

一弥「トンネル？」

結「宝塚のお父さんが犬の散歩でお気に入りだつて話してたの」

一弥「へえ」

結「あの子、聞いてないようで、よく大人の話聞いてんだよね」

一弥「あとで、親父に電話してみるわ」

× × ×

一弥が電話で話している。

結、キッチンで食器の汚れを軽く落とし、食洗機に入れる。

電話を切る一弥。

一弥「陸が言ってたトンネルって生瀬駅のトンネルだつて」

結「ふうん」

一弥「正月、遊びに来いってさ。トンネルに連れてってやるって」

○生瀬駅廃線跡・近くの道

一木が運転する車が停車し、結、陸、

一弥が降車する。

一木も運転席から出てくる。

一木「帰りたくなったら電話して？ 迎えに来るから」

一弥「わかった、ありがとう」



結「ありがとうございます」

陸「お祖父ちゃん。行つてきまーす！」

一木に元気よく手を振る陸。

○同・トンネルの入口

一弥、陸、結の順番でトンネルの中に入っていく。

あつという間に暗闇に吸い込まれ3人の姿が見えなくなる。

○トンネル・内

暗闇。

じやりじやりとバラストを踏む足音。

結「結構、歩いたよね」

一弥「うん。なんか全然目が慣れない、何にも見えない」

結「陸、大丈夫？」

陸「うん、大丈夫」

一弥「ぎゃっ」

一弥が枕木に蹴つまずいて倒れる音。

結「ちよつと危ない。先頭が倒れないでよ」

一弥「痛い、なんか擦りむいた」

結「大丈夫？」

一弥「少し左に寄ろう、右側に、枕木が立ってかけてあつてさ、やばい」

一弥、立ち上がり歩き出す音。

陸「ああ、もうパパ、もつとゆっくり」

一弥「ごめん」

じやりじやりとバラストを踏む足音。

結「延々、真っ暗なんだけど、これどっかに出るのお」

一弥「どっかに出るでしょ、トンネルなんだから」

陸「あ！　なんか見える」

一弥「うわ、やめろよ、陸、怖いこと言うなよ」

結「あ、本当だ！　なんか見えてきた」

一弥「あ、なんか明るくなってきた」

陸「出口だよ、ママ、パパ」

おわり